

勤労、総評と決別、独自路線を推進

役選が引金、国労と熾烈な対立決定的

国 鉄

国鉄改革労組協議会、一企業一組合へ多数派形成

国鉄動力車労働組合は七月二四日総評に脱退を通告、会費の納入を凍結した。公労協、県評、地評からも必然的に脱退、役員引上げとなり総評に対する打撃は必至である。総評は何とか再考を促したが、可能性はない。脱退の理由は先の総評大会の役選問題、国労の山崎委員長を副議長に選出、勤労出身の事務局次長が外されたことが引金となった。単に人事問題ではなく、国鉄改革に対する国労との激しい対立が決定的な段階となり、これ以上総評に止まることは無意味と判断したもの。これまでの勤労の一連の取り組みからみても、今回の総評方針とは相容れるものではなく、脱退は当然の帰結ともいえよう。これにより勤労は総評の「枠」から離れ、自由に独自の路線を進むことになった。今後、国鉄改革労働組合協議会を軸に、将来の総連合、一企業一組合を指向、国鉄改革、雇用の確保、新事業体への多数派形成の既定方針遂行を目指す。

組織をめぐる闘いは更に熾烈化

公 企 労 レ ポ ー ト

▽：勤労松崎委員長は一九日、北海道地本定期大会で「総評は国労の立場を守るだけに終始、国鉄改革に対する勤労の骨身を削る努力をないがしろにした。もはや総評に止まる必要はなく、正々堂々と出ていく、総評は今後国労と一緒にやって欲しい。これが最後に贈る言葉だ」と総評脱退の意向を表明した。すでに総評大会最終日の一八日午前、役員問題に不満を表明して退席、大会をボイコットしたことから予想された成行きであった。

国鉄問題を中心とした今期総評大会は、勤労の主張は全く受け入れられず、ワンサイドの勤労攻撃、中傷、誹謗に終始した。ここ数年來、現実路線をとってきた総評の今回の姿勢に、不可解な面が残る。国労の数の前に押切られた形となった。国労が、統制処分を要請したという説もあり逆に勤労の仕掛けだといふ説があるが、いずれにしてもな

るべくしてなった、当然の帰結であった。

▽：通告を受けた総評は、さらに説得を続けるとしつつも、今後国鉄闘争は、社会党案を基本に総評を舞台に闘っていくしかないとしているが、ダブル選の敗北で組織の建直しが急務となっている折から、勤労脱退の影響は大きい。会費の年間六千万円はとにかく、本部、公労協、県評からの人材引上げの影響は深刻である。解決の名案はなく、総評の苦悩は続きそうだ。

▽：総評から脱退して行動の自由を確保した勤労は「野に放たれた鬼」（福原書記長）として独自の路線を歩むことになる。共同宣言四組合と当局は、この決断を高く評価し歓迎しているが、国労は、残念だとしながらも国労攻撃を意識して闘志をかきささない。

労労間の組織拡大をめぐる闘いはさらに熾烈となる。新しい局面を迎えるとき、機敏に対応する組合とそれが出来ない組合の違いが注目される。

昭和61年8月10日

ポ ー ト レ 労 企 公

3 (昭和30年1月17日第3種郵便物認可)

総評の体質、方針では国鉄再建は不可能 四労組協議会軸に、組織間の信頼深める



勤労・福原書記長

役員問題が総評脱退の直接の動機

【総評からの脱退について、書記長の率直な見解をお伺いしたい】

直接のきっかけは、総評の役員をめぐる問題です。今年の総評大会は国鉄問題が一つの焦点でしたが、それは動労方針と国労方針をどのように取り扱い、最終局面にきた国鉄問題についてどのような方針を出すかということでした。そうしますと、これは当然役員にも反映することになるわけです。ところが役員問題につきましては、当該者の一方である動労に何の話もなく、しかも総評として出された定数削減についても何ら明らかにせず結果として国労委員長が副議長に座り、動労選出の事務局次長がやめるということだけに終り、スリムになるということも何らなしえないという結果となりました。これは、われわれとしてきわめて不満だということです。たとえば一二人いる副議長を三人にするという案が組織機能委員会で出されました。しかもその途中で、三人が五人になり、七人になってさらに一〇人まで増やすという段階で

国労委員長を副議長に据えるかどうかということに課題になり、結果として一〇人になったといういきさつがあるわけです。

国労サイドの情報で中傷、誹謗

これが、脱退のきっかけです。ただし先程も言いましたように、最大の問題である国鉄についての方針と役員の問題は密接不可分なものです。方針についてはどうかといいますと、ダイヤ改正での国民運動を中心としてこれから取り組むということです。しかしこれにつきましては、利便性、安全性をはかるということですが、われわれはすでに一昨年の段階でいわゆる日比谷の七・五六集会にみられるような結果から出発して今日にいたっているわけです。まして、誰でもプロなら知っているようにダイヤ改正の作業というのは何カ月前ということではなく、一〜二年前から取り組まなければならぬ課題です。そういうことを、われわれは前段から総評側にも話してきた経緯があります。にもかかわらず方針としては、利便性を含めたダイヤ改正国民運動を提起するという、全くもって後手々々の内容でした。それだけではありません。国鉄問題をめぐる総評議長のあいさつ、いま述べました方針、さらに論議、総括・答弁と終始一貫していわゆる国労救済運動に全面的に乗り出すということであつたわけです。

たとえば各県評、単産から出された意見では、国労からのワンサイドの情報を基礎にしまして、デマを含め動労に対する中傷、誹謗の意見が続出し

総評方針では国鉄再建は不可能

ト ポ レ 企 公

ました。これをいさめるといふこともありませんでしたし、答弁のなかには、さらに動労に対して矛先を向けることを承襲するようなものがありましたし、われわれとしてはこれらの意見について、この間の苦しい闘いを踏まえれば受けるわけにはいかないと考えています。一例をあげますと、福岡の県評の方の発言というものは、われわれがなみなみならぬ苦労をした広域異動の取り組みについて、宿舎も決めてない、仕事も決まってい

そういうことをよくも動労はやるものだ、民間でもこういうことはしないという、全くでたらめな発言をしているわけです。こういうデマがまかり通って、しかもこれに基づく方針が作られるような総評体質、あるいは総評の指導性、それについてわれわれとしては強い不満をもっています。こういうと感情的レベルに聞こえるかもしれませんが、そうではなくて国鉄の問題について方向を決める今回の総評大会でありましたし、国鉄問題を通じて総評労働運動の帰趨を決められるような状況下においての論議であつたわけですから、われわれとしては、単にわれわれの方針と相反するからということだけではなく、あるいはデマをあげせられたということだけではなく、大きな意味合いにおいて極めて問題があると判断しています。しかもこの総評大会だけではなく、三月一〇日の動労、国労、総評の三委会議、あるいはそれ以降国鉄再建本部の会議、企画委員会の会議等のなかで、わが動労は成果を含めた報告をしてきました。が、そのことが受け入れられることにならず今日遂に国労救済ということに踏み切つたわけです。このような一連の過程からみて、もはや総評に止まることは国鉄改革を成し遂げることも、わが動労の血と汗でつくりあげた成果をさらに発展させ

ることも不可能である。総評の労働運動をさらに発展させることも、われわれとしてはこれ以上成し得ない、この段階では総評から脱退することが賢明であると判断したわけです。

【これまでの一連の過程から、脱退の事態もある程度予測されたわけですか】

そのように言つてさしつかえないと思います。たとえば鉄労との共闘、そのことについて総評の皆さん方は強く否定をしました。しかし鉄労との共闘を否定するということは、総評のサイドでいえば同盟との話し合いを否定するということですし、労線統一について論理として認めたいということにつながりますし、これはおかしいことだと思えます。ことほどさように、多くの討論を積み重ねてきましたけれど、分かつてはいるが国労を何とか救済しなければならぬということに大きな軸足をおいて総評大会を運営したものだと思われ

許せない総評真柄事務局長の発言

ます。われわれとしてはそれらのことについて危惧をもっていましたけれど、わが動労が作り出した取組み、あるいは今後の方針等について分かつてくれる人も多勢いるわけですから、総評大会でアピールしたわけですが、結果としてはあのような運営と討論になつたわけです。ところが総評大会の前段で総評と国労との間で話し合いがあつたと思われまふ。その内容は分かりませんが、国労から総評に対して動労の統制処分の要請があつたとも聞いています。その後判明した武藤書簡などから判断しますと、いわゆる仕掛けがあつたというように思わざるを得ません。仕掛けがあつたということをわれわれも自覚しましたが、先程いったように長い間でのわれわれの総評に対する申入れなどもあり、今日の判断に立ちましたから、もし仕掛けがあつたとすれば、逆仕掛けがあつて

もいいのではないかと、こういう思いも含めて、総評からの脱退を決定したということです。

【総評議長は、委員長と合って何とか翻意をうながすということが言われていますが…】

われわれが脱退をした理由は国鉄方針、役選の二つをめぐってのことです。今さら総評が役選、方針を変えることはできないでしょう。したがって総評脱退をひるがえすことはあり得ません。しかし総評がこの問題に関してどう捉え、どのような指導性を発揮するか、そのすべてを否定するものではありませんが、これについてマスコミを通じての真柄事務局長発言はわれわれは全く許し得ません。何をいつているかといいますと、動労が脱退した第一の理由は大会で追いつめられたからであらうといっています。あるいは、総評を利用するだけ利用して、利用価値がなくなったから脱退

健全な労組として全民労協加入

をするということではないかともいっています。こんな低レベルな問題の捉え方では全く憤まんやる方ないと思います。また、社会党からも出るようになったと党の幹部でもない労働組合の役員がいつていることはどういうことかという思いがします。総評からの松崎に対する働きかけということがマスコミでいわれましたが、真柄さんが来たわけではなく、常任幹事の方が代表として訪れまして真意を聞かせてくれということでした。われわれは逆に、真柄さんの真意を聞かせて欲しいといったところ本人でないから答えられないということでした。総評の不誠実がはっきりしたわけで、総評に戻るということはあり得ません。

【今後はどういう方向に進まれますか】

われわれが総評から脱退したことで、総評以外のナショナルセンターのレベルで動労への働きかけをするかどうかの論議があったように聞いていま

すが、労線統一の大きな流れがありますし、産業体になれば民間労働組合になるわけですから全民労協加入を決定してこの流れに積極的に参加していくことになりました。当面は国鉄改革労働組合協議会ができたわけですから、ここを活動の一つの軸として国鉄改革を進めること、また一企業一労働組合を作ることに向けて全力をあげたいと思います。国労は動労への組織攻撃をかけるといっていますが、これについては有難く頂戴します。

【四組合の間は、とに角過去にいろいろあったわけで、四月一日を目ざしてどういう方向で進むということになりますか】

人間的信頼関係を組織的信頼へ

なります。それを通じて一企業一労組の方向へ進むことになるわけですが、われわれはできる限り早くこの道筋を達成することが必要だと思っています。国鉄改革から新事業体の活性化を図るためにはその一方である労働組合が健全な労働組合として強力に発展することが重要なわけで、政治スケジュールからして法案成立段階、新事業体への移行の段階、それを一つの軸にして総連合、一労働組合に発展させることが極めて自然だと考えています。ただし鉄労とわれわれの間には、ニュアンスの違いがあります。これは無理からぬことで、鉄労側からすればかつてマル生を含め、動労との間にさまざまな問題があったことは事実です。それについては鉄労大会で和解を前提に陳謝しました。しかし下部組合員にはまだ感情としては残っていることは否めませんから、鉄労としても即動労と一組合ということはできにくい事情は理解しますが、そこは具体的な行動を通じて、人間的信頼関係から組織的信頼関係に高めていくことが重要なことと思っています。

(文責記者)



動労の考え方当局と歩調 合う、脱退は当然の帰結

国鉄・南谷労働課長

【動労の総評脱退は、国鉄の今後の労使関係にどう影響をもたらすでしょうか。また、この実情をどう理解しておられるでしょうか】

動労が最近とっている行動様式からすれば、むしろ総評内にあることが動労にとってこう動きたい、こうあるべきだということに対してブレイキになっていたのではないかなという感じがしています。しかし、動労としても自ら飛び出すというよゆうなことは極力避けられたであろうし、かといって現実的な動きをしようとすれば、総評にいればやりにくい、行動の自由を確保できないということがありその意味では今回の行動は結果として、こんご動労が意思決定をするうえでプラスになると思います。私どもにとっても現在の動労の考え方は、国鉄改革を進めていく、新しい労使関係を作っていくことに足場をおき、労組の基本である雇用を確保していくということ、これは私どもと歩調が合っているわけで、総評からの脱退が行動の自由を確保できるという意味において好結果だと思えます。何故動労が総評にしていることよって拘束を受けるかといえ、国労の行き方と動労の行き方が違うわけで、それが同じ総評内において、国鉄闘争対策本部という形で調整しようとしたわけですが、総評も動労の行動に対して同情を寄せ理解を示しながらも、そして国労の行動に対して注文をつけながらも数の上で国労が大きいということから、国労の方に引っぱられるというか、そ

ちらに足並みを揃えさせる努力が行なわれてきました。本来ならば総評が指導力を発揮するために、動労の行き方が正しいとすれば、国労を動労の方向に引っぱるべきです。しかしそれが出来ず、逆の動きをしたことから、こういう結果になったのだろうと思います。総評大会での議論の場というのは、動労が包囲された格好で、動労悪者論のなかで、飛び出さざるを得なくなるような状況づくりがされたと私どもは見えています。総評の昨年来の動きから見ますと、何か解しがたい動きだと思えます。役員構成の問題も、聞くところではいろいろあったようですが、それもさることながら、それ以前に動労に対する厳しい非難があったことは、理解しがたいことです。動労は労組として本当に真面目にやってきたと思えますよ。少なくとも国労よりはるかに真面目ですよ。それが総評大会の論議はまるでアベコベですから私達にとつて総評というところは全く不可解としかいいようがありませんね。

【動労は今回の脱退で足かせが取れ基本路線を従来以上に積極的に展開すると思えますが、これから、よりスピーディーに対応できることになりま

すね】

そのとおりの思います。逆に総評としては、結果として今後、国労と一体で進めざるを得なくなつたわけですから、それがどういう形で出てくるか、推移を見守りたいと思えます。

ことから、国労の方に引っぱられるというか、そ

（文責記者）

組織問題には我々も厳しく対応する

国鉄労働者間に差別があつてはならない



国労・秋山企画部長

言い掛かりに過ぎない動労の主張

【動労が総評、公労協を脱退しました。国労はかなり厳しい国労対応をやっているわけですが、この動労の動きをどう見ておられますか】

今までいろいろな見えておられますが、国鉄闘争という立場でできるだけ一致点をめざしてやってきました。こうして唐突に総評大会から退場・脱退が行なわれたわけですが、国鉄問題が緊迫しているときだけに残念という感じですが。

【今後の対応となるとどうなりますか】

組織問題で相当厳しくなるといってこれであれば、私どもも厳しさをもって対応せざるを得ないと思えますが、問題は現時点で労働組合としての選択の道の話でしょう。私どもとしては今一番大切な時機に総評から離脱するという事は、一般的には残念なことと思いますが、離脱する理由が四組合協議会のなかで語られているように、あたかも国労つぶしが国鉄改革だというようなことは、同じ労働組合として如何なものかという気持が強くなります。

【脱退の理由に社会党案を基本にしながら総評を舞台に闘う方針に動労は一貫して従ってきたといっていますが…】

総評や社会党に対して私どもの組織の現実というものもは分かってもらっており、ある意味では社会党、総評の趣旨に沿いかねる場合もありましたが、出来るだけ労組としてきちっとしていきたいとしてやってきました。動労がいつておりますように今回の総評大会が仕組まれたかどうかというようなことが問題でなく、労働組合としての対応というものを総評全体や単産がどう評価したのかというのが問題です。

【そうしますと、残るのは兄弟組合が激しい組織の対応ということになりますね】

組織間の対決と同時に、国鉄改革のなかでの職員との差別の問題ですね。四組合のほうは、国労を差別せよといってくるでしょうし、私どもとしては国鉄労働者の間に差別があつてはならないということで行くわけで、これをめぐって、これは本格的な対立になるでしょうね。どちらの言い分が正しいか、これは総評、社会党だけでなく、これまで国労、動労を支えてきてくれた人たちが判断してくれるものと思います。

【ここまでくると、長いつき合いではあったが、淡々としていく、ということですか】

松崎さんの最近の言動というのは、労働組合指導者としてあるまじきものと思います。国労と動労との間に、今何かを期待することは到底あり得ない状況にあると思います。

(文責記者)

動労の意見も吸上げ、纏める努力した 今後は社会党案で総評を舞台に闘う



森原総評副議長

【同じ公労協の中で、動労と国労とが路線の違いが根底にあって、総評大会が引き金になったという事になっていますが、今回、動労の公労協からの脱退をどのように受け止めておられますか】

社会党案を基本、総評を舞台に対応

動労の言分は、総評は国労に片寄っている、雇用を守るために骨身を削っていないではないか、そういう国労に加担をして、動労を袖にしたと言っておりますが、私はそれ自体は全く間違っている、私も総評の国鉄闘争委員会の副議長をやっている訳ですが、どちらかと言えば国労を随分厳しくしたしなめて、動労の意見を吸い上げながら一つのものへ纏める努力をしてきたつもりです。従って、大変不満に思っています。

ただ、だからと言って動労はけしからんと言ってみてもそれは意味のないことで、問題は国鉄闘争を成功させる、約四千万の署名をもらっている訳ですから、国民の皆さんの期待に応えると同時に、労働組合として当然、雇用と組織を守ることが当り前のことですか、そういう意味合で成功させ

ることが、これからの総評運動、労働運動にとって一番重要だろうと、これが成功するとすれば動労も反省しなくてはならないだろうが、今の段階でとやかく言うべきではなく、まずもって国鉄闘争の成功のために全力をあげようという立場をとっております。

【公労協へも脱退通告していますが、もう説得の余地はないのですか】

引き続き説得の立場はとっておりますが、事実上今の段階ではどうにもなりません。総評の舞台に移っています。

【動労の言分だと、社会党案にしても、総評の決定にしても日頃従ってきたのは動労で、その決定を破ってきたのは国労ではないかと…】

国労自身も組織が混迷してきたことも事実ですしなんとしても雇用と組織を守るといふ労働運動本来の姿に立った方針をきちんと立てろということを書いてきた訳です。

なんとしても内部ですっきりしないと駄目だということを書いてきた訳ですが、結果がああいうことになった訳ですから、今度は総評段階でさらに説得をしていきますけれどもまずもって国鉄闘争は、社会党案を基本にしなから総評を舞台に闘っていくしかないと思います。眨しても意味のないことですから。

【だんだん公労協も寂しくなりますね。公労協として何か手を打つといったことは…】
代表幹事の中で努力は引き続きやっていますが、見通しは極めて暗いです。(文責記者)